

# 資料読解力・文章表現力審査 (2025)

## (受験上の注意)

- 1 問題は17ページあります。
- 2 試験時間は90分です。途中退出は認めません。
- 3 解答開始の合図の後、まず受験番号・氏名・フリガナを、受験票を見ながら、解答用紙の所定欄に正確に記入してください。
- 4 解答は必ず解答用紙の所定欄に横書きで記入してください。欄外に記入のある解答は無効です。
- 5 答案作成には、HB程度の濃さの黒であれば、鉛筆、シャープペンシルのいずれを用いてもかまいません。
- 6 問題冊子、下書き用紙は持ち帰ってください。

以下の問題1と問題2に解答しなさい。解答用紙の所定欄に解答すること。

問題1 次の文章【I】～【Ⅲ】を読んで、後の問1～10に答えなさい。

【I】ドイツ語、イタリア語、フランス語などのヨーロッパ系の言語を学んだことがある人は、これらの言語が名詞を「文法的性」によって分けることを知っているだろう。私たちはモノを数えるときに「助数詞」を使う。「バナナ一本」「リンゴ一個」「クルマ一台」と言うときの「本」「個」「台」などである。文法的性にしても助数詞にしても、モノ（厳密に言えばモノの名前である名詞）を文法で決められたカテゴリーに分類しているのだ。といっても、こう言っただけでは、<sup>(1)</sup>バクゼンとしていてわかりにくいと思われるので、文法的性、助数詞について、もう少し詳しく述べていこう。

「文法的性」(grammatical gender)の「性」(ジェンダー)というのは、もちろん「男性」「女性」という生物学的な性に由来する。ただし、文法的性の「性」がいつも男性、女性の二つで、いつもこの二つのどちらかのカテゴリーに名詞を分けているかという、そうではない。イタリア語やフランス語は男性、女性という、生物学的な性とおなじ二つのカテゴリーに分ける。しかし、言語によっては男性、女性の他に第三、第四の性カテゴリーを持つ場合もあるのだ。

例えば、コーカサス地方のゴドベリ(Godoberi)という言語では、「父親」「祖父」「おじ」など、人間で男性を示す名詞は男性カテゴリー、「母親」「祖母」「おば」などは女性カテゴリーである。そして、その他の名詞、つまり動物や植物、非生物はすべて、第三のカテゴリー(中性)に入れられる。この分け方は非常にわかりやすい。ちなみに、人の子どもは第三のカテゴリーに属す。この言語に限らず、性文法のある言語の多くで、人の子どもは中性扱いされる。一人前の大人でない子どもは性を持たない、と言語的には分類されるのである。

ただし、文法的性を持つ言語で、ゴドベリ語のようにわかりやすいカテゴリー分けをする言語は非常に稀である。フランス語やイタリア語、スペイン語は性のカテゴリーを男性、女性の二つしか持たないので、これ自体はわかりやすいのだが、そうすると、太陽とか、月とか、机とか、<sup>(2)</sup>イスとか、そもそも性を持たないモノも男性、女性いずれかのカテゴリーに入れられることになる。

また、動物の場合、オスとメスがいるわけだが、必ずしも動物の生物学的な性は文法の性と一致しない。というのは、多くの動物の名前はオス、メス共通である。(例えば、英語ではメスライオンに lioness ということばはあるが、これはあまり一般的ではなく、lion ということばがオスライオンにもメスライオンにも用いられる。)

文法の性は名詞につく。[ a ] それがおスネコでも！

マーク・トウェインはドイツ語について以下のように語っている。「ドイツでは女の子 (Mädchen) は性がないのに、チューリップにはある……木は男性でその<sub>(3)</sub>メは女性、葉は中性である。ウマは性がなく、イヌは男性、ネコは女性……おスネコもだ！」。

動物やモノの文法上の性が、性文法を持つ様々な言語の間で一致しているわけでもない。太陽はドイツ語では女性、スペイン語は男性、ロシア語では中性である。つまり、文法的性を持つ言語の間でも、それぞれのモノをどの性のカテゴリーに入れるかは、言語によって大きく異なるのである。

[中略]

読者は、文法的性を持つ言語でのモノの分類の仕方が、とても変わっているとびっくりされたかもしれない。しかし、私たちの言語である日本語にも、外国人からはとても変だと思われることがある。

私たちはモノを数えるとき、「一本」「一枚」「一匹」などと数える。この「本」とか「枚」は、考えてみると、実に雑多な名詞に使われる。例えば、「本」は鉛筆、フォーク、きゅうり、バナナ、野球のバット、針金、電線など、細くて長いものを数えるときに用いられる。つまり、「細くて長いもの」というくくり方で、文房具や野菜、果物、スポーツ用品など、実にさまざまな種類のモノが「本」カテゴリーに含まれる。

さらに「本」は実際には形を持たないものを指す名詞にも使われる。例えば、電話の通話、野球のホームランの数、コンピュータのプログラム、スポーツジムのトレーニングプログラム、柔道の試合や、技の数(技あり一本)などにも使われる。これは私たち日本語話者には当たり前に見える。しかし、助数詞を持たない言語を話す人たちにとって、助数詞でのモノの分類は、[中略] 不思議なものに見えるらしい。

さきほど文法的性のところで、性カテゴリーが男性、女性しかない場合でも、言語が違うと同じモノが別のカテゴリーに分類されることがよくある、と述べたが、同じことは助数詞にもいえる。

日本語と中国語は一見対応する助数詞が存在するように見える。例えば、<sup>チャン</sup>張という中国語の助数詞は平たいモノを数えるときに用いられるので、日本語の助数詞「枚」と同じかと思ってしまう。だが、実はそうではない。日本語では机やテーブルやベッドを「枚」で数えることは考えられないが、中国語では「張」で数えるのである。テーブルやベッドの広い面が平らなので「張」だと考えるのだろう。シーツやタオルは日本語では「枚」で数えるが、中国語は「張」では数えない。(中国語には日本語にない、細長くて柔軟性のあるモノを数える助数詞「<sup>ティアオ</sup>条」がある。中国語ではシーツやタオルは薄いモノとしてではなく、柔軟なモノとして「条」で数える仲間に入れるようだ。)

このように、(b)モノは多くの場合、複数の知覚あるいは機能属性を持っていて、どの属性に注目するのかは言語によって異なるのである。

【II】英語を始めとする多くの言語は、モノを数えられる、数えられないという観点から文法的に分けている。英語を勉強した人ならおなじみの、可算(countable)・不可算(uncountable)名詞を区別する文法である。先ほど<sup>(4)</sup>ショウカイした文法的性による分類は、人工物などの性がないモノも男性にしたり女性にしたりしなければならないので、とても<sup>(5)</sup>コンランしそうだが、可算・不可算の分類はそれよりも意味的にわかりやすいように見える。人や動物、コップ、本などは、みな「数えられるモノ」である。それに対し、水や砂、塩、粉などは「数えられないモノ」だ。ここまでは、単純明快である。

ただし、すべての名詞の分類がまったく明快か、というと必ずしもそうではない。可算・不可算文法は、名詞で表される世界のすべてのモノ、すべての概念について、「数えられるモノ」「数えられないモノ」という二つのカテゴリーのどちらかに分類しなければならない。「愛」とか「友情」のような抽象的な概念も例外ではない。抽象的な概念は、手にとって数えることができないからすべて「数えられない」グループに入るのか、というとそういうわけでもない。

例えば日本語で「考え」と訳される語が英語ではいくつもあるが、idea,

concept, viewなどは可算名詞で、数えられるモノとみなされている。しかし、thoughtは基本的に不可算名詞である。「証拠」は、一つひとつの事実を証拠として別に数え、積み重ねていくイメージがあるので、evidenceは可算名詞のような気がする。実際、日本人が英語を書くとき、ほぼ全員がevidenceを可算名詞扱いにして、“We have many evidences”と書く。しかし英語ではevidenceは不可算名詞で、けっしてone evidence, two evidencesと言うことはないのである。

私たちは米も豆もどちらも「<sub>(6)</sub>ツブ」という助数詞で数えることができる。しかし、英語では「豆」は[ c ]でmany beansのように言うが、riceは[ d ]で、many ricesとは絶対に言えない。furnitureは、机や〔中略〕ベッドなどの集合なので、[ c ]だと思いがちだが、“I bought one furniture.” “I have many furnitures.”とは言えないのである。

しかし、このように様々な（数えられる）モノを<sub>(7)</sub>ハウカツするような名詞はすべて[ d ]かというところではなく、ネコ、イヌ、ハムスターを一匹ずつ飼っている場合に“I have three animals in the house.”というのとはまったく正しく、“I have much animal.”はありえない言い方なのである。乗り物も同じで、乗用車、トラック、オートバイを所有していたら“I have three vehicles.”と言う。

このへんの感覚は、英語非母語話者にはわかりづらいが、英語母語話者にとっては、idea, concept, view, animal, vehicleという可算名詞概念とthought, evidence, furnitureのような不可算名詞概念は、非常に違った概念として捉えられているらしい。言い換えれば、英語話者はモノだけでなく、名詞で表すすべての概念について、それが「数えられる個体」なのか「数えられないぼんやりした境界のないもの」なのか、を基準に分けており、それが語の意味の重要な一部になっているのである。（例えば、日本語の「証拠」という語では、一つひとつの事実を「証拠」として考えるが、英語では、積み重なった事実全体のみがevidenceとして考えられ、一つひとつの事実はevidenceではない。その意味では、「証拠」とevidenceは、直接翻訳することができない別の意味を持った二つの単語と考えられるべきだろう。）

ちなみに、英語では「数えられるモノ」は直接複数形にするが、「数えられな

いモノ」は直接複数形にできず（数えられないのだから仕方がない）、数えようと思ったら、a cup of tea, a pot of tea, a glass of water のように、数える単位を示さなければならない、ということはよくご存知だろう。

私たちは日本語でモノを数えるとき、どうするだろうか。お茶やワインや水、つまり英語でいう「数えられないモノ」を数えるときは、英語と同じように「一杯のお茶（ワイン、水）」という。砂糖も砂糖一袋、一匙、などと単位を示した上で数える。

日本語が英語と違うのは、動物や機械、コップやペンなど、明らかに「数えられる」モノについても「一匹のネコ」「一台の車」「一個のコップ」「一本のペン」というように、助数詞を使うことだ。つまり、日本語では英語のような「数えられないモノ」と「数えられるモノ」の区別はしないようである。助数詞はとりあえずすべての名詞について、英語の不可算名詞のように、数える単位が必要であるとして、その上で、「小さい動物」「<sub>(e)</sub>大きい動物」「細長いもの」「平たいもの」といった独特の基準で世界のモノを分類しているのである。

【Ⅲ】 英語は数えられるモノと数えられない物質の名前を文法的に区別するので、可算名詞と不可算名詞は表現の上で区別される。それに対し、日本語はその区別をしない。〔中略〕では、日本語と英語のその違いは、私たち日本語話者と英語話者の世界の見方になんらかの影響を与えているのだろうか。

実は可算名詞、不可算名詞の区別というのは、概念的には、私たちが思っている以上に大切な区別なのである。なぜかというと、ある存在に対して「同じなのは何か」という問題に直接かかわってくるからである。私たちはあるコップ、例えば陶器のコップと、別の、アルミでできたコップを「同じ種類のモノ」と考える。二つはともにコップであるからである。では、一つ目の陶器のコップの取っ手は、そのコップと同じものか。そうは考えない。取っ手はコップそのものではないからである。

今度はバターについて考えてみよう。目の前に、箱から出したばかりの四角いバターがある。このバターの隅をちょっと切り取ってみよう。その切り取ったバターのかけらは、もとのバターと同じものか。同じものである。

コップの場合には、[ f ]。かたやバターは、そもそも「バター全体」とい

うものが存在しない。箱や缶で売られているバターは、バターという物質の、ある量の塊<sup>かたまり</sup>でしかなく、その一部もまた、バターなのである。

このようにコップのようなモノと、バターのような物質は、「同じ」という概念自体が異なる。つまり両者は、根本的に性質の異なる存在なのである。これを哲学では「存在論」的区別と呼ぶ。アメリカのクワインという哲学者は、この存在論的区別は英語のように可算名詞・不可算名詞を区別することによってのみ、意味をなす区別であり、子どもは名詞の可算・不可算の区別をする文法を習得することによって、この概念を理解できるようになる、と考えた。

しかし、そうすると、このような疑問が生じてくる。日本語のように、可算名詞・不可算名詞を区別しない言語では、モノと物質の本質的な違いを理解できないのだろうか。日本語では、すべての名詞が、数える単位を自分で持たない、英語でいうところの不可算名詞にあたるとしたら、日本語話者は、世界に存在するすべてを「物質の塊」と見るのだろうか。(これは<sup>(8)</sup>トッピーウシもないことに思えるかもしれないが、陶器のコップを「陶器の塊」、陶器の箸置きも「陶器の塊」、ガラスのコップを「ガラスの塊」と考えることは一応可能である。このように考えた場合、この三つで同じとみなされるのは、陶器のコップと陶器の箸置きで、ガラスのコップは別物と考えられる。)

〔中略〕筆者は、日本語話者と英語話者に、あるモノ（例えば陶製のレモン絞り）を見せた。次に、それと別の物質でできた、同じ形のモノ（木のレモン絞り）と、最初のモノと同じ物質のかけら（陶器のかけら）を見せた。どちらが最初のモノと「同じもの」なのかを実験に参加してくれた日本人とアメリカ人に尋ねた。

別の時には、物質をある形に形作ったもの（例えば木くずを角張ったU字型に置いたもの）を見せ、次に、それと別の物質（皮を細かく切ったもの）を同じ形に置いたものと、同じ物質（木くず）の山を見せた。この場合も、どちらが最初のモノと「同じもの」なのかを実験参加者に尋ねた。

どちらの場合も（陶製のレモン絞りも、U字型に置かれた木くずも）、二つの選択肢のどちらを選ぶことも可能である。片方は、形が同じで物質が違う。もう片方はその反対で、物質が同じで形が違う。しかし、存在論によれば、最初に示されたものによって、「同じ」の意味は異なるはずである。陶製のレモン絞りの

場合には、物質が異なっても同じ形、機能を持つモノが「同じ種類のもの」とみなされる。U字型の木くずの場合には、物質が同じことが「同じ種類」を決め、どのような形に置かれたかは関係ない。もし可算・不可算の文法的な区別がモノと物質の本質的な違いの理解を可能にするのなら、英語話者であるアメリカ人はこのとおりに「同じもの」を選ぶだろう。他方、日本人は、レモン絞りのようなモノの場合にも、砂のような物質の場合にも、「同じもの」は物質が同じほうのはずだ。

結果はどうだっただろうか。日本人も、アメリカ人と同様に、レモン絞りのようなモノの時には、物質が同じほうではなく、形が同じほうを選んだ。つまり、日本語話者がすべてのモノの「同じ」を物質の同一性で決める、ということはないのである。しかし、木くずのような物質に対して「同じもの」を選ぶ際に、英語話者と日本語話者の間で違いが見られた。日本語話者は、ほぼいつも物質が同じほうを選んだのだが、英語話者は物質が同じほうと、形が同じほうを、ほぼ半々に選んだのである。つまり、英語話者は日本語話者よりも形に強く注目をするようだ。

レモン絞りのようなはっきりとした機能のためにつくられたモノ、U字型の木くずのように触ればすぐに形が崩れてしまうような物質のほかに、外見上でモノと物質の中間に位置する対象に対しても「同じもの」を判断してもらった。これらのモノは固くて、一部をつかんで持ち上げると全体がいっしょについてくるところはレモン絞りと同じで、木くずとは異なる。しかし、形に意味はなく、機能もわからない。例えば、そら豆のような形をした蠟ろうの塊〔中略〕や、ゆで卵の半分の形をした石膏の塊などである。これらのモノに対して「同じもの」は形が同じものか物質が同じかけらか、と尋ねると、英語話者と日本語話者で選んだものが異なった。英語話者はほとんどの場合、違う物質でできた同じ形のモノを選んだが、日本語話者は同じ物質のほうを選ぶことが多かった。

これらの結果から何がいえるのだろうか。まず、日本語話者がモノと物質の本質的な違いを理解せず、世界に存在するすべての対象を物質として認識するというような極端な言語相対性はないといえる。日本語話者も、モノに対しては形と機能が同じモノ、物質に対しては、形は違っても同じ物質のかけら（あるいは一部）を「同じ種類のもの」と判断したからである。

しかし、日本語話者と英語話者の判断がまったく同じだったわけではない。木くずのような形がすぐ崩れてしまうような物質や、堅固なため、物質かモノかの判断が、見た目からはつかないような曖昧なモノに対して、日本人は物質に注目して、物質が同じものが「同じ種類」とみなす傾向が強かったが、アメリカ人は、形に対して日本人よりもずっと強い注目を見せたのである。

日本人とアメリカ人の見せた、「同じもの」の判断での違いはどこから来るのだろうか。やはり、これは可算名詞・不可算名詞の文法的区別があるか無いかという、言語の違いから来ているのだろうか。

この実験では、実は「同じ種類のもの」を決める、という課題だけではなく、実験で使ったのと同じモノや物質に対して、それぞれ実際には存在しない新奇なことばをつけ、そのことばがどちらの選択肢に使えるか、という課題も行った。例えばレモン絞りに対し、「あなたの知らない外国語では、これはフェップと呼ばれます。では、フェップはどちらですか」と聞く。名前というのは、名づけられた対象に対する認識を反映するはずである。実験に参加した人が、命名された対象を「モノ」だと認識し、さらにモノは物質の同一性ではなく、全体の形と機能が「同じ種類」を決める、ということを理解していれば、その名前は同じ形を持つ別のモノに適用される。命名された対象を「物質」と認識し、物質にとって「同じ種類」とは、形は関係なくて物質そのものの同一性である、ということを理解していれば、同じ物質のかけらや山に名前を適用するはずである。

日本語では、「これはXです」と言えばよい。英語の場合には注意が必要だ。英語では、そもそもそのことばが可算名詞なのか、不可算名詞なのかは、ことばがどのように言われるかで、だいたいわかる。例えば“This is a(n) X.”と言えばXは可算名詞、“This is (some) X.”と言えば不可算名詞である。ただ、this X, the Xという言い方だと可算名詞でも不可算名詞でも可能である。そこで、日本語と同じようにXが可算名詞なのか不可算名詞なのかわからないようにするため、アメリカ人に対して、“Look at this X.”という言い方で名付けをし、選択をしてもらうときには“Can you find the X?”と聞いた。

日本人とアメリカ人が、形が同じ場合、および物質が同じ場合のどちらにおいて、教えられた新奇語で名付けるか。それに関する判断は、「同じものを選ぶ」課題でのそれぞれの言語グループでの選択と、ほぼ完全に一致していた。

さらにアメリカ人に対して、新奇語を可算名詞あるいは不可算名詞として提示してみた。ある人には“This is a(n) X.” 別の人には“This is some X.”として名前を言ったのである。

すると、はっきりと不可算名詞とわかるように名前を言った場合には、名前が可算か不可算かわからなかったときに比べ、物質が同じほうの選択がずっと多くなった。しかし、可算名詞とわかるように名前を言ったときは、可算か不可算かわからなかったときと、選択のしかたがまったく変わらなかった。つまり、アメリカ人は、可算か不可算かわからないように言った名前を、可算名詞として受け取っていたのである。

英語では、名詞は必ず可算名詞か不可算名詞のどちらかである。可算か不可算かわからない名詞、というのは存在しない。実験の状況で、可算か不可算かわからないように新奇語を言っても、そのことばを聞いた人は、それが可算名詞なのか、不可算名詞なのか決めなければならない。このような判断を行うとき、英語話者はとりあえず、可算名詞だと受けとるようである。これは語彙全体の中で可算名詞のほうが不可算名詞よりも多く、思いつきやすいということが原因なのかもしれない。

いずれにせよ、<sup>(g)</sup>どの名詞についても、必ずそれが可算なのか、不可算なのかを、明らかにしなければならないという英語の性質が、初めて聞く名前の意味を考えるとときに、形に注目するように英語話者にバイアスをかけるということがわかったのだ。

(今井むつみ『ことばと思考』2010年、岩波書店より、  
問題作成上の都合で小見出しを省くなど、一部改変)

問1 下線部(1)~(8)のカタカナをそれぞれ漢字にきなさい。所定の解答欄に楷書<sup>かいしょ</sup>で丁寧に解答すること。

問2 空欄 [ a ] には次の文 i ~ivを適当な順序に並べた文章が入る。後にあげた順序のうち、最も適当なものを一つ選び、ア~クの記号で答えなさい。

- i. ネコやイヌはそれぞれオスとメスがいるわけだが、動物の生物学的な性に呼応して、文法的性が変わるわけではない。
- ii. 文法上の性は代名詞とも連動しているので、ネコを代名詞で表すときには「彼女」となるわけである。
- iii. 例えば、ドイツ語ではネコは女性名詞だから、オスネコも文法的には女性として扱われる。
- iv. つまり、「ネコ」「イヌ」「ライオン」という語が男性、女性カテゴリーに割りふられるわけである。

- ア) i → ii → iii → iv
- イ) i → iii → ii → iv
- ウ) ii → iii → iv → i
- エ) ii → i → iv → iii
- オ) iii → ii → i → iv
- カ) iii → iv → ii → i
- キ) iv → i → iii → ii
- ク) iv → ii → i → iii

問3 下線部(b)の内容と最も適合する具体例を、次のうちから一つ選び、ア～クの記号で答えなさい。

- ア) 日本語では机の平たさが注目される
- イ) 日本語ではテーブルの平たさと頑丈さが注目される
- ウ) 日本語ではシーツの柔軟さが注目される
- エ) 日本語ではタオルの細長さと薄さが注目される
- オ) 中国語では机の薄さが注目される
- カ) 中国語ではテーブルの平たさと頑丈さが注目される
- キ) 中国語ではシーツの柔軟さが注目される
- ク) 中国語ではタオルの細長さと薄さが注目される

問4 空欄 [ c ] と空欄 [ d ] に入る用語を、それぞれ本文中から抜き出して、各解答欄に記しなさい。同じ記号の空欄には同じ用語が入る。

問5 下線部(e)に該当する日本語の助数詞を漢字で記しなさい。

問6 文章【Ⅱ】の趣旨に最も適合するものを、次のうちから一つ選び、ア～カ  
の記号で答えなさい。

- ア) 英語の furniture は、机やベッドなどを含む集合なので、不可算名詞である。
- イ) 英語の animal は、個々のネコやイヌその他をまとめた集合なので、可算名詞である。
- ウ) 英語の vehicle は、トラックでもオートバイでもその他の乗り物でもありうるので、可算名詞である。
- エ) 英語母語話者は furniture を、ぼんやりして境界がなく、数えられないものだと考える。
- オ) 英語母語話者は animal を、動物以外との境界はぼんやりしていても、数えられるものだと考える。
- カ) 英語母語話者は vehicle を、乗り物の種類が明確な境界で区別されるため、数えられる個体だと考える。

問7 空欄 [ f ] に入る一連の文として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、ア～カの記号で答えなさい。

- ア) 陶製のコップとアルミ製のコップは、全体として見比べられて「同じ種類のモノ」と判断される。取っ手の形をもとにそう判断されるのではない
- イ) 陶製のコップとアルミ製のコップは、全体として見比べられて「同じ種類のモノ」と判断される。取っ手の有無をもとにそう判断されるのではない
- ウ) ひとつのコップの全体が「同じ種類のモノ」を判断するベースとなる。コップの取っ手とコップ全体は「同じ種類のモノ」とはなりえない
- エ) ひとつのコップの全体が「同じ種類のモノ」を判断するベースとなる。陶製のコップが陶製の皿と「同じ種類のモノ」とはなりえない
- オ) 全体がどのような物質でできているかは度外視される。このため、コップが皿と「同じ種類のモノ」ではないと判断される
- カ) 全体がどのような物質でできているかは度外視される。このため、陶製のコップがアルミ製のコップと「同じ種類のモノ」だと判断される

問8 ゆで卵の半分の形をしたガラスの塊が、ある英語母語話者に提示され、その人が“Look at this X.”と促された後、ガラスとは違う物質でできた同じ形のモノやガラスのかけらなどが見せられて、“Can you find the X?”と尋ねられたとする。この実験の結果とその解釈として、文章【Ⅲ】の趣旨に適合しないものを、次のうちからすべて選び、ア～カの記号で答えなさい。

- ア) ゆで卵の半分の形をした金属の塊が選ばれた場合、新奇語であるXは可算名詞として受け取られている。
- イ) 卵の形をしたガラスの塊が選ばれた場合、新奇語であるXは可算名詞として受け取られている。
- ウ) 半分にしたゆで卵が選ばれた場合、新奇語であるXは可算名詞として受け取られている。
- エ) ガラスのかけらが選ばれた場合、新奇語であるXは不可算名詞として受け取られている。
- オ) ガラスのかけらを集めた山が選ばれた場合、新奇語であるXは不可算名詞として受け取られている。
- カ) 立方体に加工されたガラスの塊が選ばれた場合、新奇語であるXは不可算名詞として受け取られている。

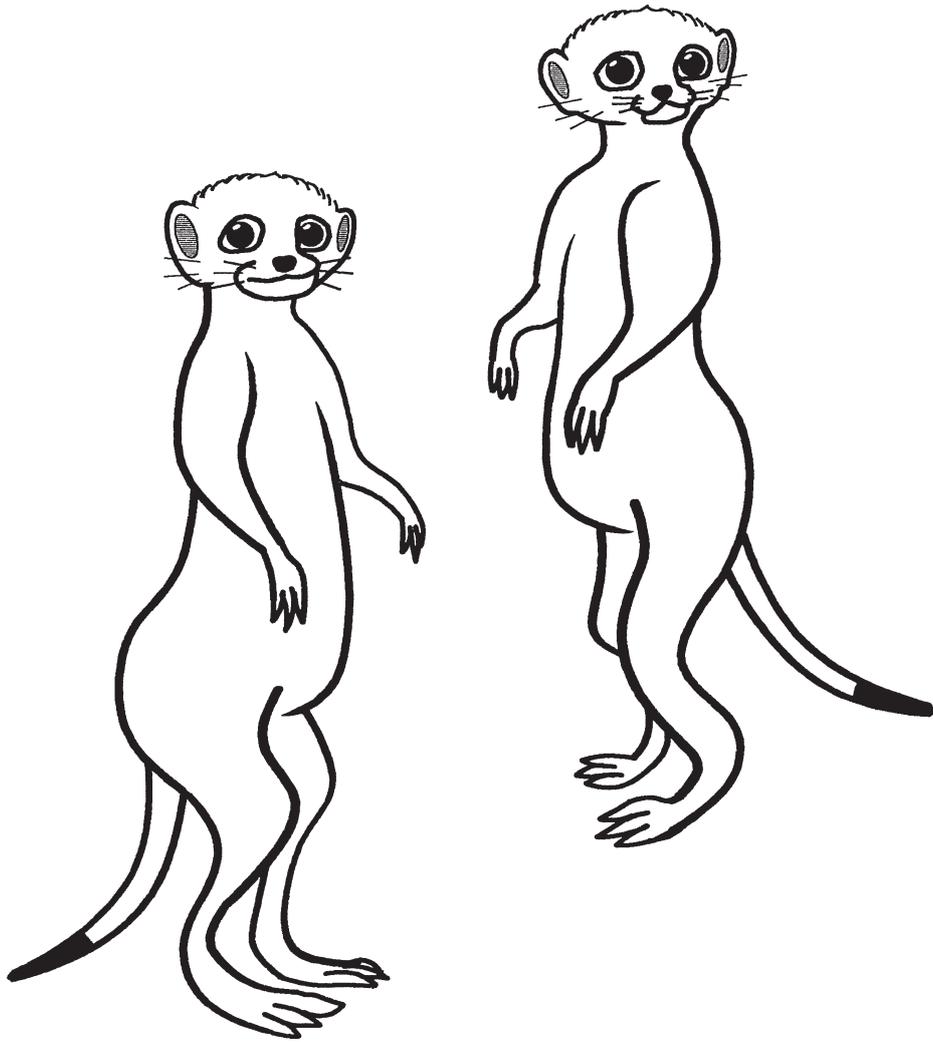
問9 新奇語で名付けをした後に選択してもらう実験の結果から、下線部(g)のような結論を導くことができるのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次のうちから一つ選び、ア～カの記号で答えなさい。

- ア) 可算名詞か不可算名詞かを常に区別したうえで判断しているのであれば、新奇語が可算名詞であるとわからない場合と比べて、わかる場合に、同じ形のほうの選択は多くなると考えられるから。
- イ) 可算名詞か不可算名詞かを常に区別したうえで判断しているのであれば、新奇語が不可算名詞であるとわからない場合と比べて、わかる場合に、同じ物質のほうの選択は多くなると考えられるから。
- ウ) 可算名詞か不可算名詞かを常に区別したうえで判断しているのであれば、その区別ができない場合と比べて、新奇語が可算名詞であるとわかる場合も不可算名詞であるとわかる場合も、選択のしかたは変わると考えられるから。
- エ) 可算名詞か不可算名詞かを常に区別したうえで判断してないのでないならば、新奇語が可算名詞であるとわからない場合と比べて、わかる場合に、同じ形のほうの選択は多くなると考えられるから。
- オ) 可算名詞か不可算名詞かを常に区別したうえで判断してないのでないならば、新奇語が不可算名詞であるとわからない場合と比べて、わかる場合に、同じ物質のほうの選択は多くなると考えられるから。
- カ) 可算名詞か不可算名詞かを常に区別したうえで判断してないのでないならば、その区別ができない場合と比べて、新奇語が可算名詞であるとわかる場合も不可算名詞であるとわかる場合も、選択のしかたは変わると考えられるから。

問10 文章【Ⅲ】の題名として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、ア～カの記号で答えなさい。

- ア) 可算名詞と不可算名詞
- イ) 助数詞と存在論的区別
- ウ) 同じ種類のもの
- エ) 新奇語の解釈
- オ) 英語と日本語
- カ) モノと物質

問題2 下の絵を見て、あなた自身が考えたことを、600字以上1000字以内で自由に論じなさい。段落のために生じる余白も字数に数えることとする。



## 解答

### [問題1]

問1 (1) 漠然 (2) 椅子 (3) 芽 (4) 紹介 (5) 混乱 (6) 粒  
(7) 包括 (8) 突拍子

問2 キ

問3 キ

問4 [c] 加算名詞 [d] 不加算名詞

問5 頭

問6 エ

問7 ウ

問8 イ

問9 カ

問10 カ

[問題2] 自由論述なので、定型的な解答も解答例もありません。

## 出題意図

〔問題1〕法や政治について考え、学ぶためには、多くの文献や資料を正確に読み取り、理解した内容と自分自身の問題関心を対話させながら、ものごとを多面的に、また深く見極める力量が必要です。そのような法学部の場合では、法律や政治に関係した内容の文章だけでなく、さまざまな分野の文章を読み取る努力が欠かせません。というのも、多面的な見方や深い見極めは、多様な意見、考え方、理解の仕方との対話によって鍛えられる能力だからです。以上の理由から、AOマルデス入試では、法学や政治学から離れた話題の文章を課題文に選んで出題しています。この課題文を正確に読み取り、深く理解する力量を、今回の入試でも試しました。課題文は例年どおり、特別な知識を必要としない、かなり読みやすい文章です。しかし、その内容は奥が深いため、読んでいくうちに、新鮮な発見をする受験生がいるのではないかと期待しました。つまり、文章の読解をつうじて、未知なる世界を自ら疑似体験するように学んでもらいたいという点が、問題1の主要な出題意図にほかなりません。この疑似体験は実のところ、これから大学で学ぶために必要な、多様な意見、考え方、理解の仕方との対話に相当します。

なお、それぞれの問では、以下のような力が試されています。

- 問1 漢字を正しく使う力
- 問2 文章に固有の文脈を正確に理解する力
- 問3 文章内容の脈絡に従って、細部の論点を分析する力
- 問4 文章が従っている論理を正確に理解する力
- 問5 文章に固有の文脈を正確に理解する力
- 問6 文章が従っている論理を正確に理解する力
- 問7 文章の基調となる考え方を厳密に学び取る力
- 問8 文章から学んだ考え方で推理する力
- 問9 文章内容の脈絡に従って、細部の論点を分析する力
- 問10 文章内容の全体像を見渡す力

〔問題2〕法学部のゼミナールは、教員から教えてもらう場というより、学生の側が自学自習をつうじて、時間と労力をかけても考えていく価値のある問題を独自に発見し、発見した問題の解決に向けて意見を交わす、いわば「教員を含む参加者全員による自己鍛練の場」にほかなりません。そのようなゼミナールでの活躍が期待できる受験生を選び出すために、当人にしかできない魅力的な着眼、考え方、ものの見方、問題の掘り下げ方などを、文章で自由に披露してもらうこと、これが本問の狙いです。

## 2025 年度 成蹊大学 AO マルデス入試 法学部討論力審査テーマ

2022 年（令和 4 年）7 月に刑法の一部が改正され、侮辱罪（刑法 231 条）の法定刑が、「拘留又は科料」から「1 年以下の懲役若しくは禁錮若しくは 30 万円以下の罰金又は拘留若しくは科料」に引き上げられた。この改正の背景には、恋愛リアリティー番組に出演していた女性が SNS 上で激しい誹謗中傷を受け、自ら命を絶ったことをきっかけに、インターネット上の誹謗中傷が改めて注目され、社会問題化したことがある。

また、近年の民事裁判例の中には、Twitter（現 X）に投稿された誹謗中傷ツイートに、「いいね」を押ししたり、単純リツイートする行為に、名誉感情侵害または名誉毀損として民事上の損害賠償責任を認めたものがある（東京高判令和 4 年 10 月 20 日判例タイムズ 1511 号 138 頁および大阪高判令和 2 年 6 月 23 日判例タイムズ 1495 号 127 頁を参照）。

このような状況は、インターネット上の誹謗中傷の重大さに（多少なりとも）対応したものであると評価される一方、個人の表現の自由を萎縮させるとの批判も向けられているところである。

現在、SNS 上にはなお誹謗中傷がはびこっている。多くの有名人や芸能人が SNS 上で誹謗中傷のコメントを書き込まれており、テレビ等に出演した刑事事件の被害者やその遺族が「自業自得」「嘘つき」などといったインターネット上の誹謗中傷を受けている。また、このような誹謗中傷は、場合によっては公然と行われず、DM（ダイレクトメッセージ）といった誹謗中傷された者にしか見ることのできない方法で行われる。

インターネット上での権利侵害については、本年 5 月にも関連する法律の改正があったが、果たしてインターネット上の誹謗中傷は直接的・間接的にどのような形で、どの程度規制されるべきか。

インターネット上の誹謗中傷の実態、その対策の現状、表現の自由の趣旨、刑罰を科すことや民事上の損害賠償で対処することの意義などを調査・分析した上で、具体的かつ論理的に自身の考えを示されたい。